

竹芸家 島村白峰齋

木 村 弘 道

序

竹はアジア・アフリカ・アメリカ等の暖地に生育しているが、その風姿の禅味豊かなのと、また工芸材料として使用に適するのが、東洋の竹に限られているために、中国あるいは日本に於ては古来珍重されて、画材として幾多の名画を生み、また工芸品として優れた作品を多数遺している。

しかし、竹を材料とする工芸作家は、その他の陶磁、金工、漆工、染織等の作家に比べて、その伝記等の解っている作家は、非常に少い様に思われる。

先年亡くなられた島村白峰齋は、籠造りの名工として有名であつた。作品は現に多数存在しているが、その他の貴重な資料は、島村家が先年火災にあつたり、昭和三十六年の第二室戸台風により、洪水に見舞われたりしたので、残念乍らほとんど失なわれてしまった。

しかし、幸いにまだ生前の白峰齋を識っている人もあるので、それ等の人達に尋ねたり、また金沢市役所にある戸籍の原本等により、竹芸家島村白峰齋の事跡を紹介したいと思う。

白峰齋伝の大輪廓について

島村白峰齋は、明治十七年十月十一日に父清三と、母以津の四男として金沢市上堤町五十番地にて出生した。本名を久米次と云い、白峰齋と号し籠造りの名工との令名があつたが、昭和三十六年二月八日に金沢市十三間町十五番地の自宅で死亡した。

以上が島村白峰齋伝の大輪廓であるが、次に白峰齋の家系や、家庭の状態を考察することにした。

白峰齋の家系及び家庭について

白峰齋の祖先は松田次郎右衛門といつて伊勢の北畠家に仕えていた士であつた、しかし、主家の没落により天正年間に加賀に転住することになつた。一向一揆の際に追れて加賀の河北郡の一寒村にのがれて、ここでひそかに竹細工の日用品を製作して、生活の糧としていた。ところが何時しかその優れた技術は、加賀藩の知悉するところとなり、以後藩の庇護のもとに、美術工芸品として発達することになつた。松田次郎右衛門は、後に前田家に仕えて、御作事

係りをつとめたと云われている。

すなわち、加賀の竹芸は松田次郎右衛門によつてその基礎がおかれ、それから連綿として隆昌の一途をたどつて来たと云うことで、白峰齋はその竹工松田の血を受けついでいるそうである。

次に白峰齋のもつと身近を見ることにしたい。

白峰齋の祖父は士族で栄久郎と云い、父の清三は天保十三年七月七日に金沢区弓ノ町の平民吉川兵太夫の二男として生れ、明治元年九月十二日に戸主の栄久郎の死後、長女の以津の聳養子として入籍し、大正十年五月七日に死亡した。

母の以津は嘉永六年三月十八日に栄久郎の長女として生れたが、彼女の母親は以津の四才の時に死亡し、以後は後妻により育てられ、昭和二十年八月六日金沢市上新町八十二番地で死亡した。

白峰齋の兄弟に五男二女がある。

長男	小太郎	明治五年三月十六日生 明治二十八年七月十三日相続 昭和七年十一月十一日失踪宣告 昭和六年九月十四日死亡と看做さる
二男	明七	明治七年十月十六日生 明治三十五年八月十二日金沢市十三間町四十五番地へ分家 昭和三十三年四月三十日死亡
三男	金八	明治十年一月二十三日生 大正八年七月二十三日死亡
長女	はつみ	明治十二年十月七日生 明治四十二年四月五日金沢市下本多町五番丁二十六番地大村貞太郎と婚姻
四男	久米次	明治十七年十月十一日生 昭和三十六年二月八日死亡
二女	房	明治二十年十二月十七日生 大正元年十二月十八日石川郡鶴来町レ五十三番地ノ二成瀬太一郎と婚姻

五男 栄 喜 明治二十五年八月二十八日生

明治三十年四月二十二日金沢市並木町士族高柳下枝の養嗣子となる

以上の七人が白峰齋の兄弟で、白峰齋とは四男の久米次のことである。白峰齋は大正三年二月二十五日に石川郡鶴来町五十三番地ノ一成瀬伝吉と「はる」の間に生まれた二女の「つよ」と結婚し、子宝には次の如く恵まれた。

長男 正 雄 大正三年二月二十六日生

大正三年四月三日死亡

長女 介 子 大正四年二月九日生

二女 辰 子 大正五年四月十五日生

三女 綾 子 大正七年二月十四日生

四女 つ る 大正九年二月三日生

大正十一年六月二十九日金沢市富本町五十九番地にて死亡

五女 友 子 大正十一年一月九日生

大正十一年一月二十二日金沢市富本町五十九番地にて死亡

二男 米 次 大正十二年三月三十日生

三男 公 進 大正十四年四月二十三日生

昭和五年一月十七日金沢市十三間町十五番地にて死亡

四男 昌 元 昭和二年十一月二十一日生

五男 修 方 昭和五年一月十七日生

六女 直 江 昭和八年十一月十二日生

以上の五男六女の十一人で、その家庭は多人数のため相当に複雑であつたことは、ほぼ推察されるところであつて、特に説明の要もないことと思う。そのためか住所が大分転々と変つたようで、白峰齋が結婚後も青草町・下近江町・富本町に各々数年づついた。なかで長かつたのは富本町で九年いたが、洪水にあつて五枚町に移り、その後十三間町に落着いた様である。次に白峰齋の工芸作家としての活躍振りを考察することにする。

白峰齋の業績について

竹芸家としての白峰齋の業績を語る最も重要なものは、白峰齋自身の製作した作品であることは云うまでもない。そして白峰齋は近年まで活躍した人であるため、多数の作品が現存していることは確かである。しかし、それ等の作品は方々に愛蔵されていて、まだ一堂に集

めたことがないので、各々比較研究する機会が未だにない、そのため発展過程や作風の変遷等を明確に扣むことが困難である。

またその他の貴重な資料も、昭和二十三年一月十六日に隣家より出火し、島村家も類焼したのと、その後の洪水のためほとんど総てが消失してしまつたので、益々その全貌を窺うことが困難となつて来るが、以下今度の調査で解つたことを報告することとする。

白峰齋の父は行李製造を本業としていたので、五人の子供には幼少の頃より、一様に細工の技術を教えた。それで長男の小太郎などはその家業をついだが、二男の明七は非常に器用な人で、また向学心が強く、金沢市近江町三十四番地の氷見仁三郎に数年仕えて本格的な竹細工の技術を修得した。白峰齋は始め父より手解を受け、後この明七より竹細工の本格的技術を習つた、しかし、その期間は割合に短かつた様で、明七もやがては竹細工の方には、あまり力を入れなくなつた様である。

白峰齋がこの道に入つたのは、丁度九才のときであると云うことで、その後はもつぱら自力で非常な苦心と努力をし、種々と編み方にも工夫を凝し腕を磨き、漸次時代色を取り入れることにも成功し、色付けの方法も相当に巧妙になり、細工の技術では、誰にも遜色がないと自負し得るまでになつた。

しかし、色付けの点にはなお大阪や東京の製品に比して遜るところのあるのを遺憾に思い、二十代に大阪の岸揚齋氏に赴き、一ケ年間色付けの方法を修業し、次いで神戸に二ケ年間、更に有馬籠の産地として知られた同地で、三百五十余年の伝統を誇る古い竹籠職の家柄の植田氏に来沢を乞うて、その秘法の伝授を受けたそうである。

この頃になつて、白峰齋の技術は非常な進歩をみせ、その製品は細工や色付法の点でも、またその作風に於ても、優良産地の製品に比して遙かに雅味に富み、優れていると云われる様になつた。

白峰齋の腕は世の識者にも認められる様になり、白峰齋も博覧会や共進会等各種の展覧会にどんどん発表する様になつた。その賞状や賞牌だけで、簞笥が一杯になつていたそうであるが、島村家が類焼の折、それ等は簞笥と共に全部焼失してしまつたことは誠に残念である。

次に示す展覧会の成績等は火災の折、他の品に混り持ち出された数通の賞状と、焼跡より出て来た焼け爛れた数個の賞牌等により、明に解つたものだけを記したものである。

明治四十一年十一月 第五回内国物産品評会に出品し賞牌を受く。

明治四十二年十一月 第七回内国物産品評会に出品し賞牌を受く。

明治四十三年五月	名古屋開府三百年紀念共進会出品奨励委員に推薦さる。
明治四十四年一月	第八回内国物産共進会出品奨励委員に推薦さる。
明治四十四年二月	石川県工芸品競技展覧会出品装飾係を委嘱さる。
明治四十四年二月十三日	富山県下新川郡設竹細工伝習所教師を嘱託さる。
明治四十四年三月十八日	私立米沢図書館に竹細工標本を一面寄贈す。
明治四十四年六月二十日	内国産業博覧会出品奨励委員を嘱託さる。
明治四十四年六月	名古屋勸業博覧会出品奨励委員に推薦さる。
明治四十五年一月十日	石川県産業共進会出品奨励委員を嘱託さる。
明治四十五年三月二十五日	石川県産業共進会出品整理委員を嘱託さる。
明治四十五年六月一日	三越呉服店に於ける第四回児童博覧会に出品す。
明治四十五年	富山実業協会主催の全国産業博覧会名誉委員を嘱託さる。
大正三年一月七日	長崎開港三百五十年紀念全国特産品博覧会出品奨励委員を嘱託さる。
大正三年六月二十四日	第十回全国特産品博覧会出品奨励委員を嘱託さる。
大正四年一月	帝国勸業共進会出品奨励委員に推薦さる。
大正四年	大嘗祭奉祝悠紀斉田紀念共進会地方幹事を嘱託さる。
大正九年八月	石川県和傘及竹製品展覧会に出品し優等の賞牌を受く。
大正十年	農商務省第八回工芸展覧会に竹製品籠炭斗を出品す。
大正十一年五月	関西北陸二府十八県聯合家庭工芸品展覧会に出品し賞牌を受く。
大正十一年	平和紀念東京博覧会に出品し銅牌を受く。
大正十一年	農商務省第九回工芸展覧会に舟形木根手附盛籠および袋組古代色附炭斗を出品す。
大正十二年五月	東京湾納涼大博覧会出品奨励委員に推薦さる。
大正十三年三月	石川県奨励会主催の工芸品展覧会に羅漢竹の花生を出品す。
大正十三年	皇太子殿下北陸行啓の砌、盛籠を台覧に供す。
大正十四年三月	石川県商品陳列所に於ける美術工芸展覧会に出品す。
大正十四年	商工省第十二回工芸展覧会に二重編果物籠を出品す。
昭和二年	商工省第十四回工芸展覧会に丸竹組下、花籠を出品す。

昭和五年十月四日	秩父宮雍仁親王殿下・閑院宮春仁王殿下の石川県商品陳列所に御立寄られし節作品を台覧に供す。
昭和五年	盛花籠秩父宮家御買上げとなる。
昭和五年	ベルギー万国博覧会に出品し大賞牌を受く。
昭和六年	商工省第十八回工芸展覧会に竹製盛籠を出品す。
昭和七年	商工省第十九回工芸展覧会に千筋網花籠を出品す。
昭和九年一月十五日	市俄古進歩一世紀万国博覧会に出品し成績優秀に付記念状を受く。
昭和十年	帝展に出品し好評を博し李王殿下御買上げになる。
昭和十七年十月十日	梨本宮守王殿下の石川県工芸指導所に御成りの節作品を台覧に供す。
昭和十八年二月	海軍へ建艦のため炭籠と花籠の二点を製作す。
昭和十八年三月	満洲国皇帝陛下へ献上の竹模様網代張四曲衝立を製作す。
昭和二十一年五月	石川県美術文化協会・北国新聞共催の第二回現代美術展覧会へ無鑑査出品す。
昭和二十二年十月二十九日	天皇陛下石川県行幸に際し石川県工芸指導所に於て作品の台覧を賜り記念状を受く。

以上は既に述べた如く資料が消失してしまつた為に、白峰齋の業績のほんの一部分の明らかなもののみを記したものであるが、これによつても白峰齋の明治・大正・昭和の三代に渡つての活躍振りがよく窺われる。しかし第二次大戦後は期するところあつてか、郷土の展覧会以外は一切出品しなかつた。

昭和二十一年五月十一日号の北国毎日新聞は、第二回現代美展の記事と共に、白峰齋の製作中の写真を掲載し、次の如く説明をしている。

「無鑑査の島村白峰齋氏は竹籠製作では日本一の称あり、一尺×八寸の花籠を製作中であるが、独特のイナズマ図に各種の波組を配したもので、同氏は中央の展覧会には頑として出品せず、郷土の展覧会にのみ後進者への参考と愛好家への期待にこたへて出品する。云々」

作品について

島村白峰齋は籠師であつて、その主な材料は竹及び籐である。竹は石川県内のものが最も多く、時には他府県より取り寄せることもあるが、籐は支那産のものを使用している。

製品は勿論竹細工が主体であつて、籐のものは割合に少く、その作品の主なものゝ籠類であり、最も多いのは花生の籠で、炭入や盛籠等も多数現存しており、珍しいのは額や茶入・香合・火鉢・衝立の類である。

その最も大切な材料である竹の種類は非常に多く、その各々がそれぞれ違つた特徴を持っているので、籠の形や性格によつて、竹を選ばなければならない。白峰齋が使用した主な竹は次の様なものである。

真竹——軟く細工がしやすいので、非常に多く使用する、しかし軟いので、籠を造つても、本当の面白味は反つて出し難いことがある。

淡竹——竹に割れやすく、細工にも向き、千筋籠はこの竹で造る、しかし竹の節と節の間隔が一尺五寸以上あるものでなければならない。

箭竹——細工に向き、桂籠等はこの竹で造る。

黒竹——細工にも向くが、割つたり削つたりせず、自然の丸のままで使用する場合が多い。

寒竹——割合に脆い竹で細工には向かないが、丸のままで使用する、しかし曲げる場合には、内側を少し削つておかないと、折れる可能性がある。

根曲竹——医王山竹または箒竹ともいい、非常に腰の強い竹で、しつかりした籠が出来るのでよく使用する。

以上の様な竹が最も多く用いられたが、この外にも女竹を始め、その作品に応じて各種の竹が使われたそうである。しかし竹と云えば、一般的に有名な孟宗竹は堅いので特別の場合以外は細工にはあまり使われなかつた様である。竹以外にも、時には籐や藤蔓、その他変つた材料をも使つたが、竹や籐以外は割に少い様である。

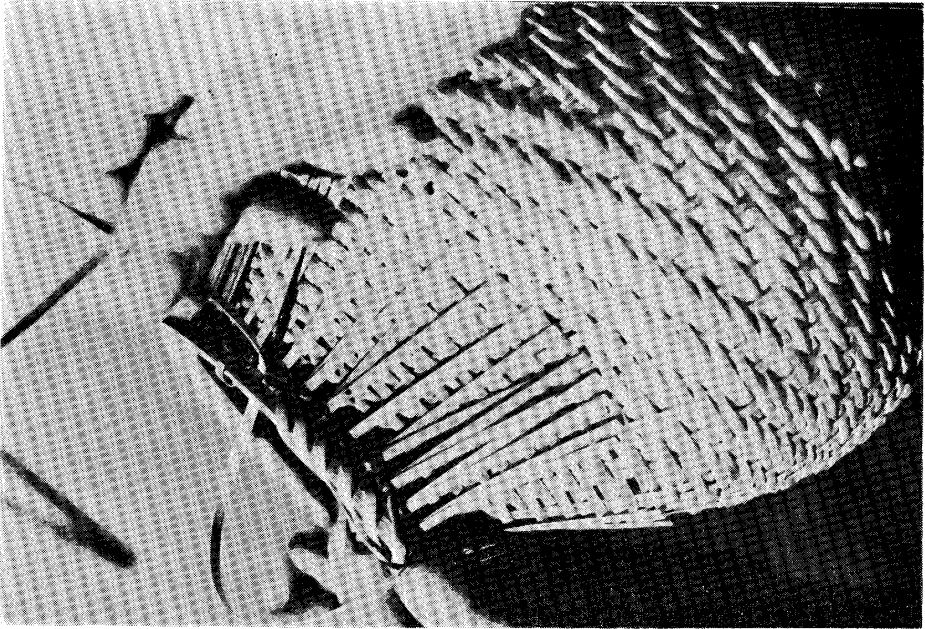
良い籠を作るには、相当の根気と高度の技術の必要なことは、云うまでもないことであるが、先ずデッサンがよく出来ていなければならない。それで白峰齋も製作に掛る前に、紙に多数のデッサンをしたり紙型を作つたりした様で、幾枚かの紙型も残つており、それには繩組とか青海組、あるいは茂久組・以与組・松葉組・唐黍組等の編み方の組合せ等が記入されており、その苦心の跡が偲ばれる。

又材料の吟味も重要なことで、例えば同じく真竹と云つても、竹一本一本にはそれぞれ異なつた性質をもつているので、白峰齋もよほど材料は気を配つたそうである。

白峰齋は自分の作品について、かつて昭和十七年六月四日の大阪毎日新聞石川版に、次の



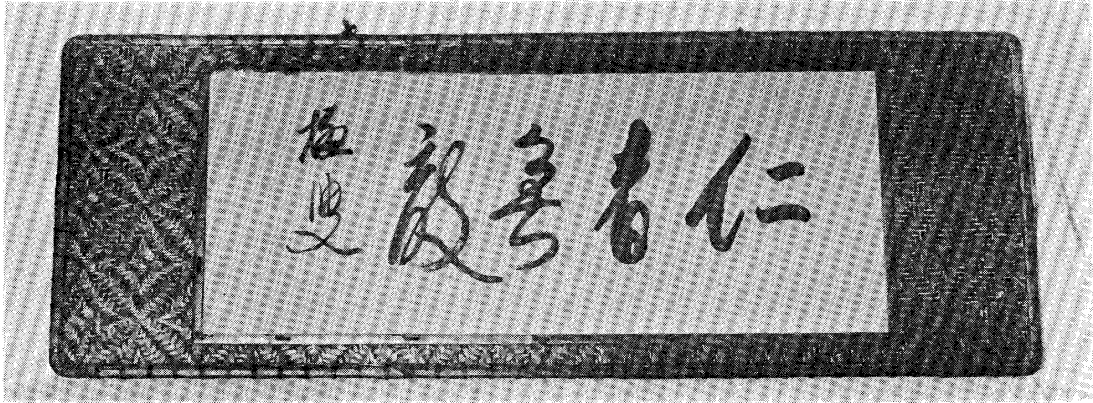
(1)



(2)



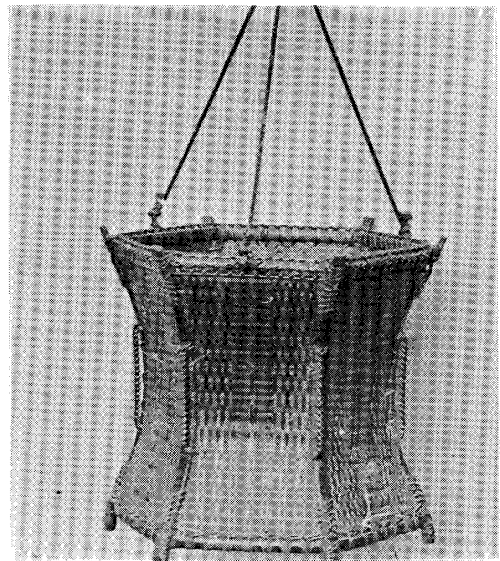
(3)



(4)



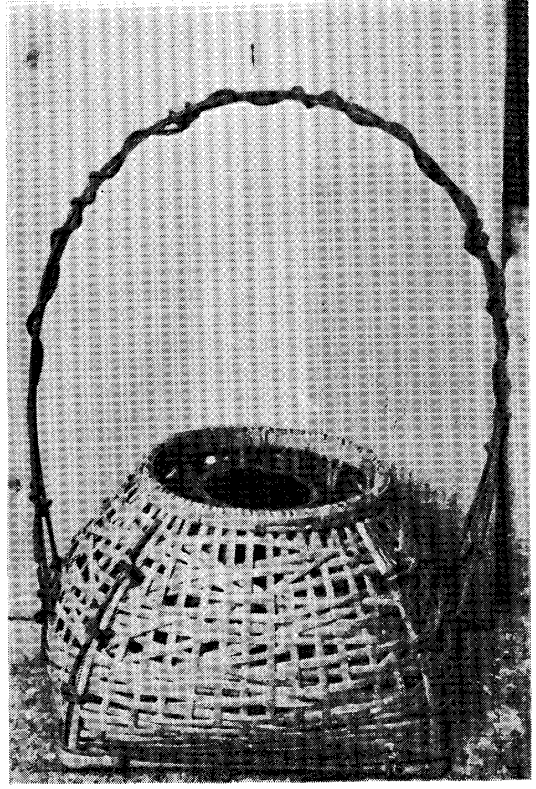
(5)



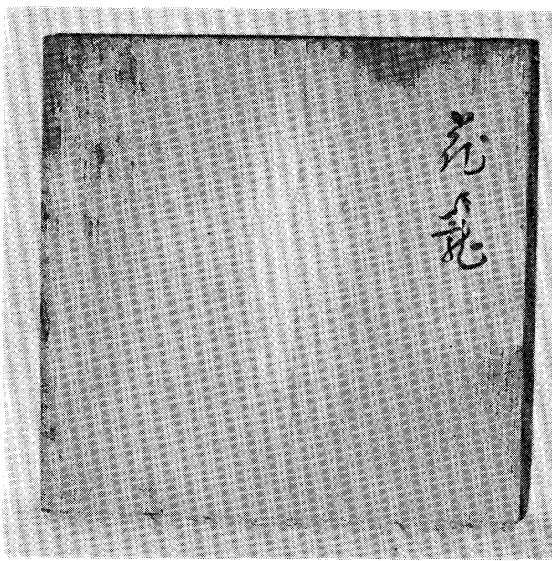
(6)



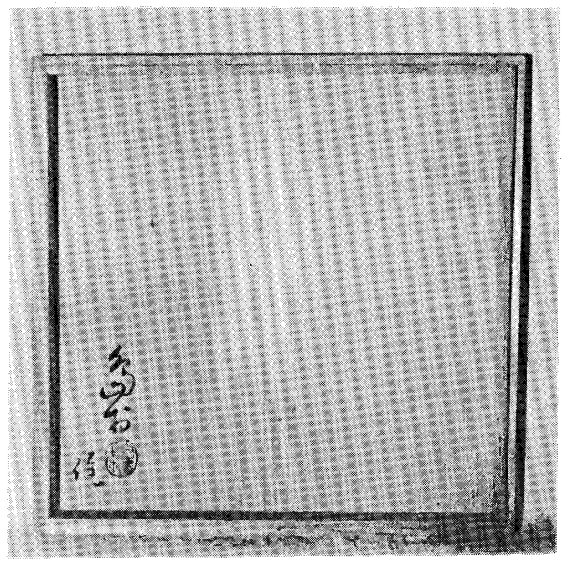
(7)



(8)



(9)



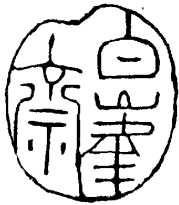
(10)



(11)



(12)



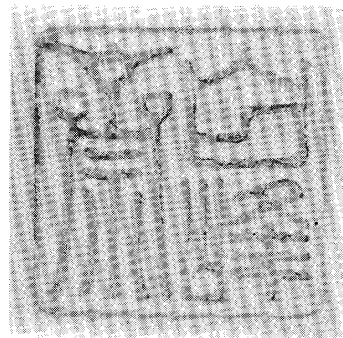
(13)



(14)



(15)



(16)

如く云っている。

「……私も九才の時父清三の後を継いでこの道に入つてもう五十年になります。加賀籠の特技は第一が竹を削ることで、その技術は長い体験によつて修得出来るものです。編方は六十余の多種にわたりますが、一言にしてその極意を申しますと固い竹から柔い味を出すということにつきると思います。それは秘術でも何でもありません、多年の修練によるものです。次に大切なのは色附です、色附を失敗すれば作品の価値は全くゼロです、私はこの色附を長年間にいろいろと研究工夫し、今では全く他の産地の追随を許さない技法と自信を得た次第です。」

白峰齋自身が云っているように、白峰齋の作品の特徴は柔か味と雅味のあることで、しかもしつかりと編まれていることである。一般には一握の巾に五十筋もの目を編む精巧な技術を用いた千筋籠等が、その竹削りの技とともに、驚異の目を持つて賞讃されている様である。勿論それ等も加賀籠の特徴を十分に出した賞讃に値いする優れたものであることには間違いないが、反対にザツクリと編まれた作品の中に優れた作品の多い様に思われる、しかもこの方が本当の技倆が必要だと、白峰齋の後継者である昌元氏も云つておられる。

色附の法には種々の方法があるが、各々作品に応じて植物染料で染め漆で留める方法が最も多く用いられるそうである。

白峰齋の人柄について

白峰齋は幼少の頃より、非常に利発で向学心が強く、また実直で曲つたことの大嫌いな人であつて、記憶力も非常に強く、小学校の頃より殆んどノートを取つたことがなく、重要なことは総てその場で暗記したそうである。白峰齋が頭の良い人であつたことを証する話として、次の様な逸話が残っている。

ある連珠の有段者が、大変な自慢をしているのを白峰齋が聞いて、「石を五ツ並べる位い大したこともない、そう威張るな。」と云つたところ、ついに有段者と手合わせする羽目となつた。白峰齋はそれまで、連珠は殆んどしたことが、なかつたがいよいよ手合わせしたところ、ついに一度も有段者の方が勝つことが出来なかつたということである。

これは勿論どこまで信用のおける話か解らないが、白峰齋が如何に頭の良い人であつたかということを物語る一つの逸話であると思う。

白峰齋は趣味の広い人で、釣や盆栽に凝つたこともあり、特に草花を愛し、草花に関する知識は実に豊富であつた。

このことは島村家の親戚には種屋を業としている家が多く、島村家も一時竹細工と共に、種屋を近江町でしていたことがあるのにもよる。そのためか白峰齋の作品の中でも、花籠は特に優れたものが多い様である。

また白峰齋の強い向学心は、種々のものを習い事をさせている。二十代から俳句に凝って多数の句を作ったそうだが、俳句のノートは島村家類焼の折、全部焼失してしまつたので、どの様な句を作ったのか今は全く解らないのは誠に残念である。その他にやはり二十代から書道や古流の生花、あるいは絵画や茶道等を熱心に習ったそうである。とくに若い頃より習った茶道や生花は、後年白峰齋の芸術を築く上に大きな影響を及ぼしたと思われる。特に白峰齋の作品には雅味があると評されるのは、この茶道や生花によつて培かれた趣味と感覚より来るものと思われる。竹細工は普通民芸的な面白さを喜ばれるものであるが、白峰齋の偉いところは、竹細工というものの持っている民芸的な性格をうまく生かしながら、芸術性豊かな美術品にまで昇華したところにあるのであつて、竹細工の作品そのものだけで、他の陶磁器や金工或は漆工等の作品と同様に、充分鑑賞に堪え得るところにまで持つて行つたことは、誠に立派であると思う。

しかも単なる技術のみに走らず花籠など、とくに花を生けるためにザツクリした感じを狙うなどは、茶道や生花の心得があつたなればこそと思われる。

また白峰齋は非常に名人気質な人で、なかなか気難しいところがあり、気が向かなければ絶対に仕事をしなかつた、しかし一度仕事にかかれば、非常な意気込みで徹夜も平気で制作に励んだそうである。それに気取つたことを好まず、いつも「私は職人であるから職人らしく職人でなければ出来ない仕事をしたい」と、また「職人の仕事は職人でなければ本当のところは解らない」とも云つていた。そうして芸術家とか美術家とか云う言葉は、あまり好まなかつたようである。

この点やはり時代の人であることを示しており、職人らしい自分のペースは崩さなかつた。その反面なかなか気位が高く、たまたま中央の展覧会の審査員から出品を勧誘されたりしても、「私の作品を審査出来る人間がいるか」と云つていたそうで、第二次大戦後は展覧会にあまり出品しなくなつた経緯も、以上のいくつかの言葉によつても大体推測できる様に思われる。

白峰齋の銘について

白峰齋と号したのは二十代のときからで、作品に銘を入れるには、白峰齋と刻銘したもの

が最も多く、漆で書銘したものもある。勿論無銘の作品も数多い様である。共箱のものは割に少く、共箱のものでは、箱書に「島村◎作」としたもの、あるいは「白峰齋」の印だけのものがよく見られる。

印は金属の竹を輪切りにした様な輪廓をした印が、最も長く多く用いられ、木に刻つた丸い輪廓の印は、六十五才以後になつて用いたものである。箱書の場合の印肉は黒であるが、絵には四角の朱の印を用いた。

結 び

種々と苦心と努力を重ね、やがて「日本一の籠造りの名人」と称される様になつた白峰齋は普通一般に加賀籠の系統を引いた籠師であると云われるが、たしかに前にも述べた様に、血筋や家柄の点、また幼少の頃父に編む手解を受け、その後兄の明七に加賀籠の技術を教わつたこと等を考えれば、加賀籠の系統を引いた作家であると言ふことが出来る。しかし単にそれだけの作家でもないことは、既に今までの考察によつても解るが、ここで今一度籠師島村白峰齋の芸術の骨組みと性格についての考察を纏めておきたい。

白峰齋は確に幼少のころより加賀籠の技術を学んだ、しかし加賀籠と云つてもそれが如何なるもので、白峰齋はそこから学んだ最も大きなものは何であつたかを考えておかなければならない。加賀藩時代の竹工は細工所の記録等によると、常時細工人が六・七人は召抱えられており、また身分の低い武士は、よく内職に竹細工をしていたと云われ、町家の竹細工も随分盛んであつた様である。しかしその頃の竹製品は農業や漁業等或は、一般家庭で日常使用する各種の籠類や弁当行李・笠・提灯・凧の骨・弓箭が主で、花籠の様ないわゆる美術工芸的なものは、割に少なかつた様である。ただ加賀藩の他の美術工芸は藩の庇護もあり、非常に盛んで、しかも技巧的に優れていることを特質としている土地柄である。その為か白峰齋も「加賀藩の特技は第一が竹を削ることである」と云つている様に、竹を剥いたり、鉋で削る技術は古くから全国随一であると云われていたようである。

白峰齋が加賀の竹細工の技術より学んだ最も大きなものは、竹を削ると云うそのことであらうと思われる。

削つた竹を編んで籠を造り、時には色付けをするのであるが、色付けについては既に述べた如く、大阪或は神戸等へ学びに行つたり、有馬籠の秘伝を教わつたりしたのを基礎とし、自分の工夫を加えながら発展させて行つたのである。

ところで一番大切な編む技術であるが、父や兄の明七から習つた技術はせいぜい高のしれ

たものであることは、前述の通りである。しかもその後とくに誰に習った形跡もなく、二十代で既に編む技術には相当な自信を持つまでになった、その秘密とも言うべきものは何であつたかと云うことを考えねばならない。それを解く鍵は白峰齋が二十代でお茶と生花を熱心に学んだことにあるのであつて、白峰齋はお茶や生花を習いながら、そこで種々の秀でた籠類を見て研究をし、各種の編方を習得したものとす。

それで白峰齋は、唐物の籠に対する知識は実に豊富であつたのと、傷んだ籠を直すことに誠に天才的であつて「白峰齋の直した籠はどこをどう直したのか全く解らない」とよく云われるのは、その間の事情を物語つていると思われる。籠は勿論使い方にもよるが割に傷みやすいものである。傷んだ籠を上手に直すと云うことが評判になれば、いきおい道具屋を始めその他の人達も修理に持つて来ることになり、それが白峰齋には大変良い勉強になつた訳である。それであるから白峰齋は、常に「編むことは自分で勉強した」と云つていたのである。

白峰齋の芸術性豊かな作品を支えている最も重要なものは、以上見て来たこれ等の技術である。たまにはデザインの点で、やや問題のある作品もあるが、それでも一応みごたえのある作品に纏めていけるのは、修練に修練を重ねたその技術が然らしめたのである。

またときには技巧に走り過ぎて、反つて欠点となることもある様であるが、それはむしろ時代の趣向の現れと見た方が良い様である。

白峰齋自身が「自分は職人である」と云つている様に、確かに白峰齋は職人であり、その作品は職人的である。しかし職人としてそれに徹したことが、竹芸家として成功したと思われる竹細工は、民芸的な趣味より好まれることはあつても、美術工芸品としての評価は、他の陶磁や漆工あるいは金工等に比して遥かに低かつたと思われる、それを少くとも同等に美術工芸品として評価される様になつたのは、多数の竹芸に携る人達の努力によることは勿論であるが、白峰齋の如き優れた作家の活躍によるところも大であると思う。

竹細工と云う民芸的なものをより、高度な芸術性豊かな美術工芸品にまで昇華し、それを一般に認めさせ得たのは、明治・大正・昭和初期の日本工芸界の趨勢より見ても、或は竹籠というものの持つ性格からしても、白峰齋の如く職人として、それに徹した人にして、始めてそれが出来たのではなからうか、白峰齋は加賀籠の系統を引き、それを完成した人と云うことが出来、また美術工芸品としての加賀籠は、白峰齋より始まつたとも云うことが出来る様に思う。白峰齋の後継者には、白峰齋の薫陶を受けた二男の米次と四男の昌元があり、特に昌元は秀でた技倆を有し、昌弦と号して既に度々展覧会にも出品し、好成績をあげておら

れることは、誠に頼しく、昌弦氏の今後の活躍を期待したい。

図版の説明

- (1) 白峰斎晩年の肖像。
- (2) 白峰斎が箭竹で桂籠を編んでいる手先。
- (3) 紗綾形に編んだ網代の額。
- (4) 七宝繫に編んだ網代の額。
- (5) 千筋編の棗の茶入。竹は淡竹である。
- (6) 枳竹編の釣花生。
- (7) 籐で編んだ四方の炭籠。
- (8) ザックリ編んだ花籠。
- (9) 表の箱書。
- (10) 裏の箱書。
- (11) 白峰斎が晩年描いた竹の絵。これは六女の直江が、書道の練習をしていた傍で、戯に描いたものである。直江は書道が上手で、展覧会でよく賞状等をもたらしている。
- (12) 作品の刻銘。
- (13) 箱書の印であるが、この印が最も長く多く使用された。
- (14) 晩年に用いた印。
- (15) 昌弦の印。
- (16) 絵に用いた印。